

花火

小林まもる

花火の帰り
きがかりな生徒に会った
しばらく学校に来ていない
声をかけると下を向いたまま
ななめに向きを変え
一人で帰っていった

実ることを求めない
華やいだ瞬間の断続のあいだ
かれはずっとどこを
見ていたのだろう

いまは破裂することも
花開くこともないやみの中
人声も遠く途絶えて
太古の風が重く垂れ込め

とぼとぼとあてもなく
惨めに破裂したいつかの
自分の影をおいかけ
いまも今の自分の周りを
さまよっているのだろうか

